



# ippo(いっぽ)

【研究主題】 キャリア教育の視点で小・中・高を貫く教育課程の編成  
～学部間をつなぐ仕組みを活かした取組～

今回は、12月2日の公開研究協議会のワーキンググループ③分科会での話題について紹介します。

ワーキンググループ③（高等部2・3年と外部） 分科会より  
協議題『学校から社会への移行に向けた外部機関との連携について』

## ★学校から社会への移行に向けて★

- 学校と社会の「当たり前」は違っている。学校で学んでも社会に出るとギャップがあるが、知識として覚えておいてほしいということ、また、ギャップはあるものだということを刷り込んでおいてほしい。
- レーダーチャートを使った授業がよかった。自分を知るところは、最後は障害特性を知るところまで行ってほしい。相手は変わらないので、自分が変わるしかない。リフレーミング的な手法は気休めではあるが、ギャップを埋めていくことについて有効ではないか。例えば、「嫌いだから怒っているのではなく、会社のために育ててほしいから言っているんだよ」等。
- 1年時から、地域に出ていく活動を通して、自己肯定感を積み重ね、たとえ折れても復活できることが大切。
- 実習の評価票が大事。評価を他学部にも伝えることで、小学部の内に何ができるかという視点が生まれる。自己評価が高すぎる、または低すぎる生徒も、職場の人に言われると心に響くことが多く、修正されることもあるので、職場からの評価（担当者の言葉）を伝えていくことが大切。
- 働き始めるとストレスを吐き出す相手がいなくて、そこからSNSのトラブルになることがある。発散できる相手、環境、場が必要。
- 自立というのは、人に迷惑を掛けて、世話になって生きていくことである。「仕事はストレスの塊→愚痴は言ってもいい」と肯定する気持ちが大切。

## <指導助言>

秋田県特別支援教育課 小山 高志 指導主事より

- 学んだことが本物の力になっているかを確認する場面が必要である。そのよりどころがキャリア教育全体計画である。
- 職業科で求めるのは「豊かな社会生活」である。実習の評価は、就労がかかってくると厳しくなる傾向がある。今自分でできることは、「分からないことを聞くこと」「どうやって解決するかということ」である。
- 「職業としてのめあて」の再考を。行動のめあてだけでなく「何を分かればいいのか」が分かるめあてがよい。
- 外部機関との連携がよかった。連携はどちらにもメリットがなければならない。企業との連携では企業側にもメリットがあることが、職場の理解や生徒の安心につながり、「ギャップ」の解消につながるのではないかと。何が目的で連携するのかを明確にする必要がある。